令和６年度　第３学年入学者選抜学力試験問題

一　般　科　目

国　語

注　意　事　項

1　試験開始の合図があるまで，この問題用紙を開いてはいけません。
2　問題用紙は１０ページ，解答用紙は２ページあります。試験開始の合図があってから確かめなさい。
3　監督者の指示に従い，解答用紙の各ページに受験番号を算用数字で記入しなさい。氏名を書いてはいけません。
4　文字などの印刷に不鮮明なところがあった場合は，手を挙げて監督者に知らせなさい。
5　解答はすべて解答用紙に記入しなさい。ただし，「採点欄」「得点欄」に記入してはいけません。
6　問題用紙の余白は下書きとして利用してかまいません。
7　試験終了後，配付された問題用紙は持ち帰りなさい。

長岡技術科学大学

問題用紙（国語）

Ⅰ　次の文章は、隠岐さや香『『有用な科学』とイノベーションの概念史』の一節である。これを読んで、後の問いに答えよ。なお、本文中の語句の右肩の＊は、文章の最後にある（注）の記号である。

次に紹介するのは「ジェンダー分析的視点を取り入れたイノベーション（GI：Gendered innovations）」の事例である。

性差（difference of sex）とは、妊娠出産の身体機能や性染色体といった生物学的な性（sex）の違いの問題と、性別分業や「男らしさ」「女らしさ」など、いわゆる文化的、社会的な性であるジェンダー（gender）概念がカラ(ア)む複雑な問題である。［　a　］、これまで「性」の問題については自然科学が、「ジェンダー」の問題については人文社会科学が扱う傾向が強かったのだが、GIはその分離状態の解消を目指している。GIの取り組みがなされる領域も人社・理工を超えて分野横断的であり、基礎科学、情報科学、工学および技術開発、環境、食品栄養、医療衛生、交通など多岐にわたっている。

＊シービンガーらによれば、GIは一九八〇年代から本格化した研究開発の場でのジェンダー不平等是正を目指す取り組みの延長線上にある。ただ、従来の取り組みが既存の研究開発やイノベーションの現場（先進国の男性に多く占められている）への女性の参加を促すことや、そのために必要とされる施策（たとえば育児休業や労働時間のあり方など）を行うことにあるとすれば、GIにおいて目指されているのは更にその先を行くことである。

シービンガーらがGIの実践例として取り上げている具体的な取り組みは多岐にわたるが、大まかには次の二つのアプローチがとられている。第一に、基礎科学研究から応用研究、技術開発、イノベーションのプロセスに至るまで無意識のうちに男性の身体が規範として捉えられてきた伝統を見直すこと。この伝統においては女性の身体がしばしば規範からの逸脱として捉えられてきたため、男性身体を用いたモデルが肉体的な性差の問題を無視して過度に一般化されてきたのである。［　b　］つい近年まで、医薬品の治験から車のシートベルトなどに至るまで平均的な男性の身体が基準とされ、女性の健康や生命を損ないかねない状況が残されていた。これに対しGI的取り組みとして女性や妊婦、子どもなど、多様なモデルを加えることがなされた。また、基礎科学の領域では、ES細胞、iPS細胞などの幹細胞研究において基本的に細胞の染色体レベルの性は無視されてきたが、近年、その点を見直した実験デザインが採用されはじめている。

第二のアプローチは、家庭での役割や社会経済的な立場などの文化的な要因によるジェンダー差が、生まれつきの性差と混同されたり、もしくは性差が充分なエビデンス＊や資料なしに過剰に主張されたりしないようつとめることである。第一のアプローチがいわば(A)「性差を無視すること」の問題であったとすれば、第二のそれは(B)「性差を強調しすぎること」の問題である。一見相反する主張が行われているようにみえるかもしれないが、これは従来の視点が、女性身体に「男性身体モデル」を押しつけて性差のある部分を過度に無視する一方で、それとは別の差異が根拠なく強調されていたということに由来する。古典的に有名なのは男女の知性や嗜好（しこう）の違いを強調することであろう。たとえば、そのような先入観によりゲームや情

問題用紙（国語）

報機器開発は「男性向け」のものとみなされてしまっている。しかしＧＩではその種の思い込みを排することで、情報機器やゲーム開発のための新しい市場を開拓する可能性が示唆されている。

この二点を踏まえたアプローチにおいては、従来的な科学研究のディシプリン*分業の面のみならず、研究の目標設定や意義付けという面においても、従来にはない変化が生じている例がみられる。その具体例として、途上国女性のための抗ＨＩＶ*薬研究開発の例を紹介したい。同事例では応用研究における目標設定を変えることで、女性研究者の活躍と、途上国の女性が使用しやすいＨＩＶ感染予防薬開発という二重の社会的課題に一定の成功を収めている。

開発の主体となったのはカリフォルニア大学のＡ・スゼリという研究者のチームである。彼らは、ＨＩＶ感染者比率が高いサハラ砂漠以南アフリカ地域の女性のＨＩＶ感染を防ぐような医薬品の開発を行った。扱う地域の特性ゆえ、課題は必然的に人文社会科学、自然科学・技術をまたいだ複合的なものとなった。まず、同地域では女性が男性に対して従属的な地位にあり、性交渉における発言権が非常に低いという社会的背景があった。［　c　］、発展途上国であるため各個人にとって高額な医薬品の入手が限られているという問題があった。男性側の拒否にあいやすいコンドームや、高価になりやすい女性向けコンドームなどの手段を用いての感染防止が現実的でなかったのである。そこでスゼリらのチームは、現地女性が置かれたこの困難な状況下で、パートナーの妨害を受けずに効果的にＨＩＶ感染を防ぐことを可能とする手段を探求した。

［　d　］彼のラボは、もともと応用物性物理学を専門としていたが、この事例に取り組む前に、扱う研究プロジェクトの優先目標を生物・医療工学領域にシフトさせていた。それにより、医療器具や治療を評価するために使用可能な数量的モデルを作ることのできるチームとなっていたのである。以前はモノを対象に数理モデルを扱っていたのが、人や生物を対象とする数理モデル開発に方向転換していたというわけだ。そのため彼らはこの難題を、抗ＨＩＶ薬を用いるための膣内挿入*ジェル開発という応用物性工学的問題として解決することができた。彼らがそれまで有していた物性物理の応用問題解決手法を用いれば、薬剤を含んで効果的に膣内を覆い、本人が起立しても重力で剥がれ落ちないような溶剤の開発が可能だったのである。そして、工学分野にはもともと女性の参加が少ないことで知られるにもかかわらず、この事例においては女性研究者・技術者の活躍が多く見られたという。すなわち、雇用や昇進の性差別廃止といった従来的なジェンダー平等施策では達成できないレベルで女性の関与が認められたのである。

C　スゼリらの事例を「テーマを女性寄りにしたから女性が増えた」と理解するのではＧＩの本義を理解できていないことになる。そうではなく、そもそもあるプロジェクトに女性の参加が少ない理由は、それが「男性的」文化に深く埋め込まれすぎているからと捉える視点が必要となるのだ。そしてイノベーションという観点からすれば、ある研究テーマやそれを担うチームが「男性的」文化に浸かりすぎている状況は、ある種の視点の欠落、想定外な新しい発想をもたらすには不利な条件の存在を意味する。

多様なセクター*、分野の巻き込みに伴い、イノベーションは異質な価値観がせめぎ合う領域とも化した。

問題用紙（国語）

そこにおいては、一方で多様性や社会的ホウセツ(イ)、持続可能性など本来なら非常に長期的な視野を要する理念が、他方からは新しいサービスや製品の開発を通じた市場競争という短期的な課題が突きつけられている。理工系研究者の側からみれば、それは競争の複雑化を意味する。短期的な市場での受容と社会のニーズの双方を踏まえて、研究プロジェクトの方向性や、人材配置のあり方を転換するような行動力が以前よりも期待されるようになったからである。たとえば前述のＧＩにおいて、スゼリらは応用物理学から生物・医療工学に研究領域を移し、人文社会科学系研究者と協力しながら、アフリカ地域における女性のＨＩＶ感染問題に取り組んだ。その様子はさながら知の総力戦といった様相すらテイ(ウ)している。

科学・技術を中心にあらゆる領域の専門知をクシ(エ)して多様なアクター*が協働する環境を作り出し、そこでの創造性を制御すること。そして知の総力戦において速度を保つこと。先進諸国で、このような戦いを前提とした「科学技術とイノベーション政策」に巨額の資金が投じられる時代に我々は生きている。それは幾つかの条件さえ揃(そろ)えば、ザンシン(オ)で、民主的で、効果的な問題解決の手段を社会に与えるものであろう。［　e　］、果たしてあらゆる社会、あらゆる問題にとってそれは有効なのかという問いは、まだ残されている。

社会全体が被る影響という観点にたてば、あらゆる領域でイノベーションを推し進めようとする姿勢自体の倫理性を問うこともできる。ドイツの社会学者・哲学者のハートムート・ローザ*は科学と技術、そしてイノベーションが引き起こす変化の速度を問題視し、社会における摩擦(D)を減らすためにも、変化を「減速」させる取り組みの必要性を主張している。彼がとりわけ問題視するのは、たとえば科学・技術によるイノベーションが、民主主義の意思決定速度を超えた形で社会の変化を促進してしまうような状況である。

innovation の語には一貫して「不連続な変化」という意味があった。従って、イノベーションを促進する政策とは、意図して社会に絶え間ない変化を求める政策ということになる。変化を完全に否定はしないまでも、その行く末に対して過度な楽観視も危ういだろう。どの程度の変化が私たちの社会にとって望ましいものであるのか、同時に考えていく必要はないだろうか。絶え間ない変化があるならば、絶え間ない思考もまた求められている。

（問題作成の都合上、原文の一部を省略した。）

（注）　○シービンガー＝ロンダ・シービンガー（一九五二～）。アメリカのスタンフォード大学の科学史の教授。　○エビデンス＝証拠。根拠。　○ディシプリン＝学問分野。　○ＨＩＶ＝ヒト免疫不全ウイルス。感染すると後天性免疫不全症候群（ＡＩＤＳ、エイズ）を発症する。　○ジェル＝ゼリー状のもの。　○セクター＝部門。　○アクター＝参加者。関係者。　○ハートムート・ローザ＝（一九六五～）。ドイツのイエーナ大学教授。

問題用紙（国語）

問一　傍線部ア～オのカタカナを漢字に直せ（楷書（かいしょ）でていねいに書くこと）。

問二　空欄 a ～ e に入れるのに最も適当な語を、それぞれ次の1～5の中から一つずつ選び、番号で答えよ（一つの語は一つの箇所にしか入らない）。

1　そのため　2　だが　3　また　4　たとえば　5　ところで

問三　傍線部A「『性差を無視すること』の問題」、B「『性差を強調しすぎること』の問題」とはそれぞれどういうことか。本文中の語句を用いてどちらも六〇字以内（句読点・括弧類も字数に数える）で述べよ。

問四　傍線部Cについて。「GIの本義」をふまえると「スゼリらの事例」はどのように理解できるのか。その説明として最も適当なものを次の1～5の中から一つ選び、番号で答えよ。

1　スゼリらは、扱う地域の特性をふまえて、女性のHIV感染を防ぐ医薬品の開発を行った。課題は必然的に人文社会科学、自然科学・技術をまたいだ複合的なものとなった。女性研究者・技術者の活躍が多く見られたのは、課題がこのように人文社会科学を含むものだったからである。

2　扱う研究プロジェクトの優先目標を生物・医療工学領域にシフトさせていたスゼリらは、抗HIV薬を用いるための膣内挿入ジェル開発という問題として、難題を解決することができた。このように女性の身体を考慮した研究開発だったために女性研究者・技術者の活躍が多く見られたのである。

3　スゼリらは、途上国の女性が使用しやすいHIV感染予防薬開発という社会的課題に取り組んだ。その際、扱う地域の特性を文化的な要因から分析し、現地女性特有の困難をふまえて研究開発目標を設定した。女性研究者・技術者の活躍が多く見られたのは、目標設定をこのように行ったからである。

4　現地女性特有の困難をふまえて研究開発目標を設定したスゼリらは、それまで有していた物性物理の応用問題解決手法を用いることによって難題を解決することができた。このように元々女性特有の困難の解決能力を持つチームだったため、女性研究者・技術者の活躍が多く見られたのである。

5　スゼリらは、途上国女性のための抗HIV薬研究開発というテーマを設定し、パートナーの妨害を受けずに効果的にHIV感染を防ぐことを可能とする手段を探求した。このように女性を対象とした研究開発だったために女性研究者・技術者の活躍が多く見られたのである。

問五　傍線部D「社会における摩擦」に該当するものを、本文中から五〇字以上五五字以内（句読点・括弧類も字数に数える）でそのまま抜き出して示せ。

問題用紙（国語）

問六　次の一文は、本文中のいずれかの段落の末尾に入る。この一文を入れるのに最も適当な段落を探し、その末尾の一〇字（句読点・括弧類も字数に数える）を答えよ。

すなわち、ジェンダー分析の視点から「科学とは、イノベーションとはそもそもどうあるべきか」という問いを研究・開発の現場にぶつけて、従来的な価値観からは思いつかないような研究テーマや、新しい課題の発掘を導こうとしているのである。

（以下余白）

問題用紙（国語）

Ⅱ　次の文章は、辻本雅史『江戸の学びと思想家たち』の一節である。これを読んで、後の問いに答えよ。なお、本文中の〈白文〉は出題者が挿入したものである。また、語句の右肩の＊は、文章の最後にある（注）の記号である。

＊益軒自身、＊経学における自らの功の乏しさは十分に自覚していた。たとえばこんなふうにいう。経学は＊程朱（程明道・程伊川兄弟や朱子）らの偉大な先人の書に依拠すれば十分であり、無能な自分の任ではない。子どもの学習の助けとなり、庶民の生活に役に立つ「民生日用」の書を、平明な和文で著すことが、私の任である。たとえそれが「方技の小道」や「術の学」、つまり瑣末な技術の類に過ぎないと、他の儒者からアアナドりを受けたとしても構わない。それこそが「わが志たるすぢ」（『大和俗訓』自序）、自分のかねてからの志なのだからと、益軒はむしろ自負心をもって昂然と語っている（『慎思録』「自己篇」）。

益軒は己の学の足場を、経学ではなく「民生日用」に置いた。益軒のこの確信は、何に由来するのだろうか。それを一言でいえば「事天地」（天地につかえる）という思想であった。

益軒は、儒学の教えを和文で説いた『大和俗訓』を、「天地につかえる」思想から書き起こしている。まず「天地は万物の父母、人は万物の霊」という＊『書経』の語を次のように解釈する。いのちあるすべてのもの（万物）は、天と地のはたらきによって生み出されている。だから「天地」は万物の「大父母」（偉大なる父母）にほかならない。ただそのうち人だけが「天地の正気」、天地から純粋で良質な気を＊稟け与えられた存在であり、そのぶん、心が特別にすぐれており、「五常の性」すなわち仁義礼智信の道徳性をそなえて生まれついている。だから人は、鳥獣虫魚草木あらゆる生き物＝「万物」のうちで最も優越した存在にほかならない。加えて、人は天と地の間に身を置き、天地が生みだした万物を食することで養われている。だから人は、限りなく「天地の恩」をイキョウジュしている。

人として生まれついたこと自体に「天地の恩」を自覚させる論理が、ここには組みこまれている。要するにA人としての自覚を、「天地」と「万物」（今の言葉で言えば大自然）に対する関係性において、呼び覚ましている。ここにおいて、「人の道」（道徳）は天地に対する「報恩」と意味づけられる。以上が「事天地」の意味である。私たち人間は、天地のおかげで生まれ養われている。この大きな恩に応える生き方が、正しい人の道だ、というのである。

では、「天地につかえる」には、実際にはどうすればよいのか。それは、生命を生みだす大自然の「生々の心」に随うこと。具体的には＊「仁」の徳を実践することである。仁を実践する内容にも大きく二つある。第一は「人倫を愛する」こと。つまり＊「五倫五常」に随って、君臣・父子・夫婦・兄弟・朋友の五つの人間の関係（五倫）において、正しくふるまうことである。第二は「物を愛する」ことである。「物」とは、自然界の命ある生き物すべて、要するに禽獣虫魚草木の総称である。それを、＊「礼」にかなった方法で適切に用いること。たとえば、鳥獣虫魚の乱獲は「礼」にかなわず、熟さない果実を採ることも「時」を失したことになる。

ここで注目すべきは、人倫世界だけでなく、自然世界も含めて学問をとらえていることである。B〈天地―

問題用紙（国語）

人―万物〉の三者のつながりのなかで、人間としての生き方を考える。ここに益軒儒学独自の特質がある。「天地の道」を規範として、われわれは他者（人）と自然界（万物）にいかに正しく関わって生きていくのか――それが、益軒の根本にある「問い」であった。

では、益軒の「民生日用」というのは実際にはどういうことか。益軒によれば、たとえ文章がウルワしい名文であっても、人々の生活に役立たなければ「無用の書」である。逆に瑣末な知識や技術の類でも、実際に有用であるなら、たとえ「ぬかみそひしほ」の作り方の本であっても「有益の書」であるという（『文訓』）。生活に有益であるか否かが、「民生日用」の基準であった。益軒は、どこまでも生活に役立つ著作の執筆を、己の任務と考えていたのである。

他者（人）と万物（自然）にいかに正しく関わっていくか、その正しい関わり方を具体的に明示することが、かれにとっての「有用」であり「民用」であった。その場合、人に対する正しい関わり方が「礼」、万物に対する正しい関わり方（扱い方）が「術」である。「礼」は儒者ならだれもが重視するが、「術」を重視する儒者は珍しい。

「天下の事、法術有らざる無し」、世の中のすべてのことにはのっとるべき「術」があるという。農業・機織・大工・医療・料理など、「術」をともなわないものはない。益軒からみれば、儒学とて例外ではない。儒学は、人格を磨き、その徳によって政治を担う大きな「修己治人の法術」なのだから、「儒術」だという（『自娯集』「長生有術論」）。そして「術」は、生まれつきではなく、学ばなければ得られない。こう考えるからこそ益軒は、人々が学ぶための「術」の著作に、意欲をもって執筆に努めた。

ここには学問観の転回が認められよう。朱子学では、人格的に完成された為政者の徳による「徳治」を政治の理想とした。そのため動機の純粋性が重んじられ、術策的要素は排された。功利主義への警戒からである。ちなみに、益軒より三六歳若い徂徠も、儒学は、天下を治める聖人の「大道術」だと言い切り、自ら「学んで寧ろ諸子百家曲芸の士となるも、道学先生たることを願はず（〈白文〉不願為道学先生）」（『学則』）と宣言した。道徳言説を振り回す「道学先生」になるくらいなら、むしろこまごました技術に通じた職人か専門家の方がましだ、というのである。五経の中に「先王の道」たる「物」を見いだした徂徠は、「術」を重視する益軒の学問観のケイフの延長線上に、たしかにあった。

益軒は大部な地誌『筑前国続風土記』を、現地調査をもとにまとめ上げた。それは、福岡藩内各地の風土や物産などの事実やデータを書き上げた一種の資料集である。いまの国勢調査に類する政治の基礎資料で、藩政に有用な「窮理」の書といってよい。また『京城勝覧』はじめ多くの紀行文を出版したが、それらは便利な旅行案内に類する実用的な「術」の書となっている。他の事典や辞書の類（『万宝鄙事記』『日本釈名』『和爾雅』『日本歳時記』など）も、実用的情報が盛り込まれており、その意味でやはり「術」の書であった。

「術」を知り万物に正しく関わるためには、個々の「物」の「性」（本性）を知らなければならない。たとえば、農作物のサイバイにはその作物の特性を知る必要がある。「一木一草の微細の事」まで「其の理」

問題用紙（国語）

を知り、よき時節をはかり土壌や湿気、日当たりなどの環境を選ぶことが農耕の基本である（『大学説』）。『大和本草』は日本の本草学を確立させた大著であるが、それは「一木一草の理」を解明した書であり、さらに益軒は、この「万物の理」を知る学のことを「物理の学」とよんだ（『大和本草』自序）。日本における「物理学」の語の初出は、益軒であった。

（問題作成の都合上、原文の一部を省略した。）

（注）○益軒＝貝原益軒（一六三〇～一七一四）。江戸前期の儒学者・教育家・本草学者。福岡藩に仕えた。○経学＝四書・五経などの儒学の経典を研究する学問。○程朱（程明道・程伊川兄弟や朱子）＝三人とも宋の時代に出たすぐれた儒者。○『書経』＝五経の一つ。○稟け＝うける。天からさずかる。○「仁」＝孔子は、礼にもとづく自己抑制と他者への思いやりとした。以来、儒家の道徳思想の中心に据えられるようになり、宋代には一切の諸徳を統べる主徳とされた。○「五倫五常」＝人として守るべき道徳のこと。「五常」は仁義礼智信。○「礼」＝もとは社会の秩序を保つための生活規範の総称。儀式・作法・制度・文物などを含む。儒教での最も重要な道徳観念の一つ。○ひしほ＝大豆と麦で作った味噌（みそ）の一種。○修己治人＝自分の修養に励んで徳を積み、その徳で人々を感化して、世を正しく治めること。○朱子学＝朱熹（しゅき）（一一三〇～一二〇〇）が大成した儒学の体系。朱子は朱熹の敬称。○徂徠＝荻生徂徠（おぎゅう）（一六六六～一七二八）。江戸中期の儒学者。○曲芸＝こまごまとした技能。○「先王の道」＝中国古代の王たちが作った社会の諸制度や文化の総称。○『筑前国続風土記』＝一七〇三年に藩主に献上された。○「窮理」＝物事の道理・法則をきわめつくすこと。○『京城勝覧』＝一七〇六年刊。京都の案内記。○本草学＝薬用に重点をおいて、植物やその他の自然物を研究した、中国古来の学問。

問一　傍線部ア～オのカタカナを漢字に直せ（楷書（かいしょ）でていねいに書くこと）。

問二　傍線部Aについて。「天地」と「万物」に対する関係性において、人はどういう存在か。本文中の語句を用いて八〇字以内（句読点・括弧類も字数に数える）で述べよ。

問三　傍線部Bについて。「〈天地―人―万物〉の三者のつながりのなかで」考えられた「人間としての生き方」とはどのようなものか。本文中の語句を用いて三〇字以内（句読点・括弧類も字数に数える）で述べよ。

（以下余白）

問題用紙（国語）

問四　傍線部C「学問観の転回」の説明として最も適当なものを次の1～5の中から一つ選び、番号で答えよ。

1　「徳治」を政治の理想とした朱子学では、「礼」を重視して術策的要素を排した。これに対し、世の中のすべてのことにはのっとるべき「術」があるとした益軒は、儒学もまた「修己治人の法術」なのだから「儒術」であるとした。ここに、朱子学からの転換が見られるということ。

2　「徳治」を政治の理想とする朱子学において、儒学は為政者の人格的完成を目指すための学問であった。これに対し、益軒は「天地につかえる」という思想から、「民生日用」に学問の足場を置いて、人々が学ぶための「術」の著作に努めた。ここに、朱子学からの転換が見られるということ。

3　朱子学では人格的に完成された為政者の徳による統治を理想としたため、人との正しい関わり方である「礼」を重視した。これに対し、益軒は統治もまた「術」であり、その方法は学ばなければ得られないと「術」を重視した。ここに、朱子学からの転換が見られるということ。

4　朱子学は「徳治」を政治の理想としたため功利主義を警戒し、儒学から術策的要素を排した。これに対し、益軒は他者（人）だけでなく万物（自然）を含めて学問をとらえ「術」を重視することから、儒学もまた「儒術」としてとらえていた。ここに、朱子学からの転換が見られるということ。

5　朱子学は政治における功利主義を警戒し、動機の純粋性を重んじて「礼」を重視した。これに対し、万物（自然）を含めて学問をとらえ、「礼」ではなくて「術」を重視した益軒は、儒学もまた徳によって政治を担う「儒術」と考えていた。ここに、朱子学からの転換が見られるということ。

問五

①　波線部a「有ら」、b「ざる」、c「無し」の文法的説明として、次表の空欄1～7に入れるのに最も適当なものを、それぞれ後の選択肢の中から一つずつ選び、記号で答えよ（同じ選択肢を何度用いてもよい）。

語	品詞	活用形	意味
有ら	1	2	
ざる	3	4	5
無し	6	7	

〈品詞〉ア　名詞　イ　動詞　ウ　形容詞　エ　形容動詞　オ　副詞　カ　連体詞
キ　接続詞　ク　感動詞　ケ　助動詞　コ　助詞

〈活用形〉サ　未然形　シ　連用形　ス　終止形　セ　連体形　ソ　已然形　タ　命令形

〈意味〉チ　自発　ツ　打消　テ　推量　ト　受身　ナ　尊敬
ニ　完了　ヌ　断定　ネ　伝聞　ノ　使役　ハ　可能

問題用紙（国語）

② 傍線部Dを口語訳せよ。ただし「諸子百家曲芸の士」は訳さずそのまま用いること。

③ 本文中の訓読に従い、波線部dの白文に返り点・送りがなを付けよ（送りがなはカタカナで記せ）。

問六　次の1～5について、本文の内容に合致するものには○、合致しないものには×をつけよ。

1　益軒は無能な自分の経学における功の乏しさを自覚していた。だから、その代わりに、子どもの学習の助けとなり、庶民の生活に役立つ実用的な「術」の書を平明な和文で著すことで、功を挙げようとした。

2　益軒は、人は鳥獣虫魚草木あらゆる生き物＝万物を食することで天地に養われているとする。それは天地によって生み出されている万物のうち、人だけが道徳性をそなえて生まれついているからだと益軒は考える。

3　益軒によれば、私たち人間は天地のおかげで生まれ養われているので、「人の道」（道徳）は天地に対する「報恩」であった。この大きな恩に応える生き方が、生まれつきそなわる仁義礼智信の道徳性の発揮であった。

4　益軒の「民生日用」という学問の基準は「天地につかえる」思想に由来する。「民生日用」とは他者（人）と万物（自然）への正しい関わり方を具体的に明示することだからである。この前者が「礼」であり後者が「術」であった。

5　益軒は、「術」は学ばなければ得られないと考え、人々が「術」を学ぶための著作の執筆に努めた。さらに、「術」を知り万物に正しく関わるために、個々の「物」の「性」（本性）、「万物の理」を解明しようとした。

（以下余白）